

新選百物語 巻九

○ 媛姫とはさか梵字の功か

妬なれば去り七去の御のいらさば女の秘を
氣よむとく家と乱し身をおとすも事なくふ
わしの女の身一悟しむべきの道なりし今むら
土佐の國名越とて所又公彦といふ者乃媛子
に八女とて生年二十五歳つあ
け入至く西遊されぬ近郷のこれ妙法やねこの
とさうけり其家のとまると田地もはうて山を
を掃し掃左殿といふそのわを姫二人もち事ある

婿をおせん妹をお飛といひ婿又の智と
智と縁せ妹とハ八右衛門が妻につら
なりぬお飛生得し人氣さう八右衛門近所
をさばくと秘を思ひまて場下なる公用に
て初めは是れお飛と思ひまて病れお飛
心を食ひもせと湯水も縁を替ひまて
常りける秘れも公彦といふをそけぬそのおれ
終に夫婦のつらひをくおれくおれ一がい
ふ事やお飛廿二歳の春はよをぶらくとおひ
てつらくとお飛をせ場下の医師一療治を頼

業も錢もあらず、作佛へは新報をれどもち
井はを治せしむに兼へて輕くかくれりけるが
或は八右衛門といふは、一之助の病を治るが
くのゆゑに、身にあらず、若くはれに修
あり、今羽までを今迄も、一たびは腹へて治
まゝさんと存せしが、名お錢もむいふ、
かましまのまをいたる、
名医とまひき、良茶をやと、
此は良、三十に、
かましまのまをいたる、
名医とまひき、良茶をやと、
此は良、三十に、

八右衛門、不佞さ、
正念あやまると、
乃低きうと、
さだ語れ、
を却もて、
ふて、
や、
悪相一般、

に奇あつたまゝとて遊ぶらわらぬへいふ
りつて種々病を感はるやとてさういふ
かゝ其えられども本石よりぬれなれぬのう
人もありや必を隠し給ふ一問一問かく
まば八重の心をえいなく物事にゆめ
相の心よりくは月外よりゆめく
み暮ふふと立替るてのほろひあつた
ひーがいうさ藤をほろひきまあり
ゆめられどもゆめゆめ実なりくあり
ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

憂もさうさうとてさうなく病ふと甚ま
あつたまゝとて遊ぶらわらぬへいふ
りつて種々病を感はるやとてさういふ
かゝ其えられども本石よりぬれなれぬのう
人もありや必を隠し給ふ一問一問かく
まば八重の心をえいなく物事にゆめ
相の心よりくは月外よりゆめく
み暮ふふと立替るてのほろひあつた
ひーがいうさ藤をほろひきまあり
ゆめられどもゆめゆめ実なりくあり
ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ



修らる事あり一色あり一きり公家の教を
のちに死柩をあくりせば一命の終らん事今
日にすべしはその控授と見えまゝお舟の墓
をあるゆゑとて皆に連く墓よりては路
て取物ば九月に船の埋一内のでくられ
和尙いさすやある一と視るとよせ屍よあま
かく梵字と書付八斎つを唱よ今世の無の

屍とてたればを待たる漸々すきまに
いふ今やくといふこれ虫のあつりてま
ま何の怪しき事とまけれをあくを得ずや
男よみ抱一亡者の屍より多迷のおとれ
玉出てよくともなく飛ひたりとや今
その目なきとせ居居はかす時を過ぎ
はるあろ火の虚空を飛ひ死人の口不入り
足下があざひくよわまを眼をゆきさ大息
つぎ今青いまを付ひ我忘執をさす
や録ふうさく死ぬれとてまをさるとさす

くろとまのく見覚ると多し内なるく小居のよ
くもたれ我を思へ台草の陰をてつきそい縁よ
はかとい病をくは恋しいまを海邊み妙一外
の女よそいせんい志連我まよいの物一をれを今病い
是此に思ひぬれぬやまに迷余み物といえと
音より病ひまきせ一室更のぞいなるあふと
よと望しく眼をふたれ屍をけりれおしく小陰を
縁のありおとらにすへきくの種へらと告げれ和尙
同宿あり八右衛門の音よりれ始終をくりくド
よれはとをあて大又恨む我さくあくと思ひ

新選百物語

也障磁を除くの法を初い汝が命を救ひ
ぞとぬく埋そ併半とふ一縁のわさなく
半ひたれ其のち何れ障をるはと云の縁と
いひなき一怒一喝一執若なり

○荒み初き乳母が乳房

白列草津ぬの東山道の名物と老が縁とそそく
とる一若もあそぬを井へて誰いともくその
條を食て果れを高魔王と云の罪よ若も
とて若若男女とちほくはとてやを若ぬ人ゆき
あに大徳園新とて元来若若の出家をりか

若校と去て、茶津又伊居一畝地を求む。然るに
 指南一六十歳みちるれ、其の安樂にうさるれば
 誰あまてけ人を差まざるにかりけり。一に官舎の
 として至く剛勇の人たるが力万人よつたれ。是れも
 生質柔如に女たゞく力ありといふに、けりしかあふ
 とき下僕又居風呂を焼せたり。いふ若くは新に
 に燃つたれば下僕大に驚き、騒きさへし、けり
 惣せげとも一人の力に、けりかて火もさや熾に
 ちりたれを、あきらめて、火をわけ、至人よひやくや
 知され、官舎のけり、けりも騒がけ、其まゆきて

新選百物語二

居風呂を、新のうへに扱われ、水に、とて、えん、燻
 ぬり、ちり、即座、小籠、まき、それ、を、後、て、用
 事、あり、隣、端、に、移、り、其、村、の、且、時、寺、に、年、久
 老、鐘、拂、あり、て、其、の、外、破、換、し、た、れ、に、近、し、
 以、に、修理、と、して、其、ま、にて、拵、壺、に、其、日、俵、に
 標、た、り、て、中、を、折、ん、と、け、り、と、且、中、に、さ、も、是、
 と、り、く、積、り、ち、り、破、な、ん、ま、よ、く、下、より、本、を、積、
 て、其、人、み、ま、ん、と、し、其、村、中、御、ま、り、上、と、下、
 と、騒、動、を、れ、を、官、舎、つ、これ、を、因、何、を、の、鐘、を、れ、
 い、ま、え、ん、と、て、亭、を、と、け、り、奇、ま、り、け、り、か、茶、を、と

鐘の下にのゆきよめてあひとあそぶ
 あげよるあそびゆきよるし鐘のくに
 ぞとぬぬれ人くはそよの半小窓の影下
 にほる垂るまれいとたのむそを官なき鐘とら
 まぐ又十四五間志のうにあゆむ軒の下に青とを
 一をうらな面はまつひたすにもあそびを
 あそぶいぬとくらく人くたまは
 のまはたわびとね

三尺
 のあてはゆき向ちゆくあそぶ
 にしるあそびく小窓の影下
 けをうらな面はまつひたすにもあそびを
 あそぶいぬとくらく人くたまは
 のまはたわびとね

とて其年二歳の男あり妻ハ俄の熱病して
二月三日空しくされバ乳母を抱く若くは
かぬしを或長附る乳母もくもなく先づ
親里へも子速をせ迎意ハつた及從迎國へ
人をもいらせ爰即ち乳母をその方おられ
されバ又亦如くより乳母とて四五日を過るが急
に眼を乞うる人子細をとりて乳母れども
其の暇下たる人乳母をその方おられし
乳母を召抱四五日も乳を用ひ小児も大くさ
し此乳母もよと乳母の乳の宜なるに不費

乳母のやりとを

乳母のやりとを乳母をその方おられし
人應かれと責めれども幼くは乳母を官
さく届けあうを姑若今日用年ありて他
すればその間相は免上養ふさかぬ
其のつと後をやらん好く待て
その後へ毎日出入の小農民六氣が妻あり
にむかひて持てるの在在の人を先程あれ
井月にかつとよく行て官平様を
去りて間私へと乳母を膝のまわりの乳母
俵六氣うてと乳母を在在の人よりあ

官在馬しとあきて乳母を迎むかへてまきよせを
きねのよほの乳ちの我われ一いん合があゆばさぞうと
きね子こそあらんはほもほまはあそとさほく
けはねぬまば乳母ちのわなを近ちかくすよと
そよけ毛けよごらて怒かき半はんどもかりまご
始はてお家いまより二日ふたの夜や半はん目めを
ゆ風かぜをくおのきさされては抱かかりて
官平くわんぺいの甚すこ大だいさ七八しちぱち歳さいの子ことありぬ偏へん方ほうに
毛けよて是こゝへゆゆかれんとすくくえんを
登のぼりかひぬ寝ねまうと抱かかり着ゆくおとす

其その夜よの夢ゆめ一いがまゝに夜よの城しろと思おもふ
何なにのまきよせとまゝの乳ちをさう
舌したのきねのきよのあて嘗あまあやにわ
月つきとすは開ひらきてこれに小こ半はんやむるもの
あやまをしと官平くわんぺい板いたと見みせとをわ
えさせぬ子こが抱かかりまゝに寝ね入いり
しそとまゝへて官在くわんざい馬ま板いた合があそと
あそくすおぞ彼かのの怒かき半はんの
とあをのへまゝの懐かこへまゝに乳ちを
さぬ唯ただ今いまもさまげたては何なにと

とて候まづに形ひしうに官廳の始終をきくこ
しはあつめまきしあつめ今一夜滞留せよまれを
実否と見とけんかになん怒あまふれとぞ
そにそのの事甚わりのけ氣をかくれより
されへ候へし我も進つけ候んと乳母の
まば官廳の志をくわめて立ち出る候もや
四つにさうくわ乳母の官平にたあや一回
くくそよりも燈火してし附られ官廳の
を免令やくと窺ふよふそりと音の聞
ゆれをまらやあそと官廳そのの事なるに

のぞきたより候やどたの事赤き毛のそら
そのそらとくと進づきよる官廳のされを
そらの何の中もせよ一つを引裂きてんそりの
そとて目なきをせれ足居らるよ紅の
一々いつんと這ひ官廳の候でして首す
ほあばちり候を右にわてあそと誰の
若きかく引裂かふつとそりけ首をち
手是ぬきすて乳母の乳一これやのその事
月い免さうしあわれ乳母の太息つとまづた
やどよりの有さぬゆあそと思ひ一がい

去々ん舌もくどいぞあもおど御身の御身
む家おとく其の好いさひなりきしとまねく方
い火を干しよきば大木をわ家年方猫御
い我子此官平をよりの取くしに遠いなりと
よしくこれ七十五ヶ年官を子烟の猫去年
冬より去々る猫まことぬけりすとすこに
於て去々る去々ると痛しきの官平なりとく
後をきし且ね寺にいつふし後移んは
とくしんたる

新選百物語卷二終